

2019 年 5 月 26 日（日）「神が与える忍耐」

マタイ 24:3-14（その 2）

3 イエスがオリーブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとに来て言った。「お話ください。いつ、そのようなことが起こるのでしょうか。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか。」4 そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「人に惑わされないように気をつけなさい。5 わたしの名を名のる者が大ぜい現れ、『私こそキリストだ』と言って、多くの人を惑わすでしょう。6 また、戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしょうが、気をつけて、あわてないようにしなさい。これらは必ず起こることです。しかし、終わりが来たものではありません。7 民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります。8 しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。

9 そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに会わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。10 また、そのときは、人々がだれいつまずき、互いに裏切り、憎み合います。11 また、にせ預言者が多く起こって、多くの人々を惑わします。12 不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。13 しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。14 この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。

【序論】

初めにあたり、今日は皆様に簡単な質問をさせていただきます。「皆様は今幸せですか？」「クリスチャンとして生きることに喜びはありますか？」。人間は「幸せ」というやや漠然とした状態を求めて、宗教をもつようになることが多いでしょう。では、何をもって「幸せ」と言うのかと問われるときに、明確な答えをもっているか。世の中の的には、家内安全、商売繁盛といったことが「幸せ」と呼ばれるのかも知れません。では、クリスチャンにとっての「幸せ」とは何か。少なくとも、聖書はお金持ちになること自体を幸せだとは教えていないでしょう。旧約聖書では確かに、信仰者の代表と言えるアブラハムもダビデも経済力があつたことが窺われます。しかし、それ自体が「幸せ」の条件とは書かれておらず、それが目的とも言われていません。ヨブは稀代の富豪でありながら、ありとあらゆる災いを被り、すべてを失いました。それでも彼は信仰者であり続けました。アブラハムもサラとの間になかなか子どもが生まれない苦しみを味わい、ダビデは諸外国との戦いや身内に命を狙われるような経験をしています。それでも彼らは信仰者でした。今日は、改めて信仰者の「幸せ」を考えてみたいと思います。

【本論】

前回に引き続き、マタイ 24:3-14 より語らせていただきます。この箇所を2回に分け、前回は3-8節、今回は9-14節を中心に扱うことにしました。世の終わりの前兆となる事柄について弟子たちが質問する。主イエスがそれにお答えになる。前回は世界レベルで起きてくる背教、戦争、天変地異についての預言でした。今回はキリストの共同体の内外で起きる災い、キリスト信徒の受ける苦難という点に焦点が絞られます。

本論 1. 主イエスの名のゆえに

そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに会わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。(24:9)

世の終わりの時代、戦争や天変地異で世界がグラグラと揺れ動いているとき、キリスト者はそれに追い打ちをかけるかのように世の人々から迫害を受けるということが言われています。「人々」という言葉が誰を指すのか、明確には説明されていませんが、政治的・軍事的な権力をもつ地位ある人々のことでしょう。彼らに苦しめられ、殺されると。日本の歴史においても、江戸幕府がキリシタンを徹底的に弾圧した時代があります。遠藤周作の『沈黙』という作品を、私は本でしか読んでことがありませんでしたが、先日覚悟を決めて映画を観ました。そして、改めてその迫害の凄まじさを知ることになりました。これも終末の時代に起きた一つの大迫害であったと言えるでしょう。

時代が悪くなり、種々の意味において「極限状態」になると、キリスト者は迫害される傾向があります。戦時下においては、平和のために戦う者の当然の宿命となる。偶像礼拝、暴力の拒絶は、信仰者が避けて通ることのできない戦いとなります。キリスト者は何のために戦うのか。それは、「わたしの名のため」です。キリストの御名のため。「イエス（主は救い）」という名前のためです。信仰者は救いのために迫害されるのです。福音の証のために苦しむ。このことを別の表現で言い直すならば、キリスト者は光であるがゆえに、闇に憎まれるのです。光は闇を照らす。キリストの光を帯びる者は真理を証しする。その存在がキリストの香を放っているがゆえに、悪をなす者には耐え難いものとなるのです。

主イエスが山上の説教の中で「義のために迫害されている者は幸いである」(5:10)と言われる所以はここにあるでしょう。その人は義とされているために迫害される。迫害されることによって、その人の内に義が存在することが逆に証しされていくのです。

本論 2. 教会内部における分裂

しかし、キリスト者の苦しみは、外部からの攻撃だけには留まりません。教会内部における秩序の崩壊、異端の蔓延、裏切りといった様々な出来事によって苦しむようになります。精神的に苦しいのはむしろこちらかも知れません。

また、そのときは、人々が大ぜいつまずき、互いに裏切り、憎み合います。また、にせ預言者が多く起こって、多くの人々を惑わします。不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。(24:10-12)

まず、教会内で「つまずき」が生じると言われます。これは福音に対してつまずくことで、本質的に「背教」を意味するでしょう。福音を捨てる。信仰から離れる。信仰がしっかりと根を下ろしていないと、迫害に耐えることができないのです。信仰をもっていることが、現実生活にとって不利益となり、罠になる可能性があるかと悟ると、瞬く間に捨ててしまう。迫害は本物と表面上の信仰者とを振るいにかける。

次に「裏切り、憎み合う」ということが言われます。「裏切る」という言葉は「引き渡す」が原意であり、クリスチャン同士が訴え合い、自分が助かるために仲間を売り渡すようになるというのです。『沈黙』では「キチジロー」という青年が仲間を騙して役人に引き渡すというシーンがありました。そして、拷問によって「転んだ」宣教師は、今度は隠れキリシタンを次々と告発していく役割に立たされていく。この作品は、終末的背教を描いていると言えるでしょう。

更に「偽預言者が多く起こって、多くの人々を惑わす」とも言われます。「預言者」というのは、初代教会の文脈では、使徒の次に重要視されていた役職です（Ⅰコリント 12:28）。彼らはまさしく神のことばを預かっていたのです。そして、信徒は「預言者」のことばを信じ、注意深くそのメッセージに耳を傾けました。ところが、その「預言者」が偽物だったとしたら。その人を信じて着いて行っていた人々は惑わされ、誤った道へ進んでいくようになるでしょう。偽預言者の一つの特徴は、神ではなく人間に栄誉が帰せられていくことです。教会の主がキリストではなく、人間に置き換えられる。異端的教えの行き着く先は常に人間であり、神ではありません。やがて偽預言者は正体を暴かれることになりますが、それまでの彼らの活動期間に、しっかりとした信仰の基礎、教理的な土台を持たない多くの人々が惑わされていくのです。

もう一つ、「不法がはびこるので、多くの人たちの愛が冷たくなる」とも言われています。「不法」とは、律法に聞き従わないこと。人間が自分の目に正しいと思うことを行なうようになることを言います。その行き着く先が墮落と倫理的頹廃であることは、士師記が立証しているでしょう。士師記には暗澹たる神の民の歴史が描かれ、およそ選びの民

とは思えないほどの悪事が記録されている。士師記は「**そのころ、イスラエルには王がなく、めいめいが自分の目に正しいと見えることを行っていた**」(21:25) というフレーズで締め括られています。人間は自分の思うままに生きるとき、神と人とを愛することから離れ、どこまでも自分中心になっていく。ゆえに、不法は愛の欠如に行き着くのです。教会では神を愛し、隣人を愛するという二大律法が教えられてきました。すべての律法はそこに集約されると。ところが、その愛が失われる。これが教会内で起きてくる恐ろしい終末的現実です。

本論 3. 聖霊による聖徒の堅忍

何という絶望的な預言であるか。私たちが使徒信条において告白する「聖なる公同教会、聖徒の交わり（を信ず）」から、あまりにもかけ離れた世界が描かれています。この信仰告白を偽りとしてよいものでしょうか。いいえ、主イエスは最後に希望を残しておられます。

しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。(24:13)

「**最後まで耐え忍ぶ者**」がそこに残されると。この人々を「真の信仰者」あるいは聖書全体を貫いている思想「残りの者」(remnant) に置き換えてみてもよいでしょう。「残りの者」とは、「神の審きに耐えて残り、新しい神の民を形成する元となり、繁栄し、神の律法に従って生き、聖なる者となり、主なる神様を自らの神として認めるに至る者」(新聖書辞典)のことを言います。迫害の嵐、異端や不法という戦火をくぐり抜け、信仰を守り通す者たちが尚も残される。どの時代にあっても、神の民は増加すると全体として悪くなる傾向があります。しかし、その中に必ず一筋の「信仰の系譜」が残されてきた。それが「残りの者」です。その「残りの者」は次の時代を担い、発展させ、神の法を回復させていく。世の終わりに同じことが起きるでしょう。墮落が極まる世界にあって、尚も残された信仰者が、神の審きに耐え、永遠の神の国に移されていく。新天新地を担い、二度と滅びることのない世界を形成していく。

私たちはもちろんその民の一人でありたいと願います。しかし、もし自分がそれほど悪い時代に生きたとしたら、信仰を守り通せるかと問われるとき、自信をもって Yes と答えることはできないでしょう。主イエスの弟子たちをご覧ください。彼らはそのように言って失敗したのです。代表格であるペテロは「たとえすべての者がつまずいても、私はあなたを知らないなどとは決して申しません」と誓いましたが、主の十字架の場面で恐怖に耐えることはできませんでした。私たちにも同じことが起こり得ます。

では、私たちは何の確信もなく、不安ばかりに取り囲まれて生きなくてはならないの

か。そうではありません。私たちの人間的な決意や確信ではなく、主の約束が私たちを守り支えてくださるのです。「最後まで耐え忍ぶ者は救われます」。これは確かに信仰者に忍耐を求める言葉でしょう。しかし、その人は自分の力で耐え忍ぶではありません。神の約束、主イエスの変わる事のない契約に立ち続けるのです。ペテロも一度つまずきましたが、彼の信仰を守ってくださったのは、ほかならぬ主イエスでした。「聖徒の堅忍」の教理は、私たちの根性論の話ではありません。神の約束が変わらないこと、そして、そこに忍耐をもって立ち続ける信仰者の姿が描かれているのです。

この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。(24:14)

ガリラヤという小村で始まった主イエスの宣教は、十二弟子というこれまた小さな集団によって担われていきました。しかし、この一見取るに足らない宣教活動は、やがて大きな実を結んでいく。当時の弟子たちには想像もできなかったような福音の世界的広がりが起きてきています。この「御国の福音」は全世界に宣べ伝えられなくてはなりません。今現在もウィクリフのような聖書翻訳団体から派遣された宣教師が、未開の地の言語を学び、聖書翻訳を続けています。やがてすべての民が福音を知るようになる。このことは、救いが全世界に及ぶという意味において幸いなことです。しかし、その反面において、福音を聞いた全世界に聞いた責任が問われる日が来るということでもあります。

では、私たちはどのように歩んでいなければならないか。如何なる時代にあっても、忍耐をもって主イエスを証しし続けることです。キリスト者の救いは忍耐への召しとも言えます。光とされたということは、闇の攻撃を受けるということ。しかし、それは幸いなことなのです。私たちを通して主イエスの栄光が輝くならば、それは私たちにとっての喜びであります。

【結論】

私たちは何をもって「幸せ」と言うか。それは、自分のこの世における繁栄のゆえではありません。主イエスの光が世に輝くのを見ることです。神が私たちに持っておられる関心は、私たちが神との正しい関係に生き、ご自分の聖なる御名に栄光を帰する生き方をすることです。「私たちが敬虔に、また、威厳をもって、平安で静かな一生を過ごす」こととも言えます(1テモテ 2:2)。もう一度自分の「幸福感」を見直してみましょう。私たちの人生がもはや自分のものではなく、神のものであることを思い起こしたいと思います。

【祈り】

審判者なる神よ。今日は終末の時代に起きる、教会内部での背教という現実を見ました。他ならぬ自分がその一人になるのではないかと恐れます。しかし、私たちは主イエスの約束に依り頼みます。どうか、終わりの日まで信仰を守り通させてください。主と共に生き、神に栄光を帰することのみを幸せと告白し続ける生き方ができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
困難な時代にあっても、ご自身の民を守り支え給う、父なる神の愛。
常に神の真理を示し、偽物を見抜く目を与え給いし、主イエス・キリストの恵み。
主と共に生き、神に栄光を帰することにのみ、幸せを見出させ給う、聖霊の親しき交わりが、
我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。